

一般国道276号岩内共和道路 ワークショップの活動内容について —協働型インフラ・マネジメントの取り組み—

小樽開発建設部道路計画課

蒲澤 英範
齋藤 秀敏
○遠藤 学

小樽開発建設部では、一般国道276号岩内共和道路において、地域特性を活かし、安全かつ機能的で、自然環境にも配慮した道路整備を検討・推進しているところである。その1つの手法として、地域と行政が協働してインフラの整備や利活用に取り組む「協働型インフラ・マネジメント」を実践しており、ワークショップ形式により現地確認や意見交換等を行い、設計に反映している。本文はその取り組み結果について最終報告をするものである。

キーワード：連携・協働、観光・景観、緑化・植生

1. はじめに

北海道開発局では地域の実情に合わせて効率的・効果的に道路の課題を解決し、あわせて地域の魅力向上を図ることを目指して、地域住民やユーザーと行政が協働してインフラの整備や利活用に取り組む『協働型インフラ・マネジメント』を実践している。

その内容は、(1) 北海道環境イニシアティブ（北海道の優れた資源・特性を活かした、全国にも役立つ、環境面での先駆的・実験的な取り組みを多様な主体との連携・協働によって推進）の導入、(2) 北海道スタンダード（北海道固有の課題に対する全国画一ではない北海道独自の取組）の導入、(3) 先駆的・実験的取組等の積極的な推進等である。

小樽開発建設部では、一般国道276号岩内共和道路（以下、岩内共和道路）の道路整備事業において、地域住民、地元商工会、地域の写真家、樹木の専門家、学識者、自治体等からなるワークショップを組織した。そこでの議論を基に、環境面での先駆的・実験的な取り組みを多様な主体との連携・協働によって推進するとともに、北海道固有の課題に対して全国画一ではない独自のハード整備を検討してきた。

本報告では、この岩内共和道路における「協働型インフラ・マネジメント」の活動内容について報告する。

2. 一般国道276号岩内共和道路について

事業概要

一般国道276号は北海道江差町を起点とし、岩内町、喜茂別町及び伊達市を通過し苫小牧市へ至る幹線道路である。このうち岩内共和道路は岩内町と共和町の区間において、交通安全の向上、交通混雑の解消及び泊原子力発電所での災害時における緊急避難路の確保等に資する道路として事業を実施している。

事業区間は岩内郡共和町梨野舞納（りやむない）から岩内郡共和町国富（くにとみ）までの約7.6km、道路規格は3種2級2車線の一般国道である。（図-1）

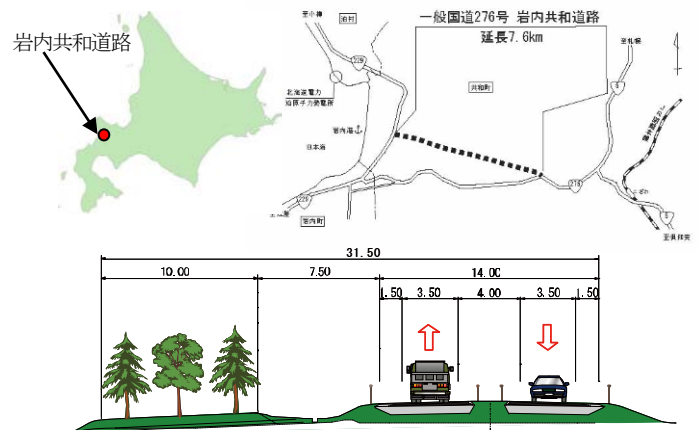


図-1 岩内共和道路概略図

また、冬季には日本海沿岸特有の地吹雪による視程障害対策として防雪林の整備、交通安全対策として分離構造の採用、景観に配慮した視線誘導施設及び景観資源の活用に配慮した駐車帯の検討を行っている。（図-2）



図-2 岩内共和道路イメージ図

3. 協働型インフラ・マネジメントについて

協働型インフラ・マネジメントの概要

協働型インフラ・マネジメントとは、地域と行政が様々な場面で協働しながら個々の地域の実情に応じた「使いやすい道路」の整備・運用を目指すものである。

これまでの道づくりとの相違点は、まず地域住民やユーザーとともに地域の資源や課題についての情報収集や意見交換からはじめ、道路の役割や求められる性能について議論する。次に、「北海道スタンダード」を含めて地域資源を活かし、地域の課題を克服するために必要な道路の構造、道路の使い方、管理の仕方について地域と共に話し合うものである。（図-3）

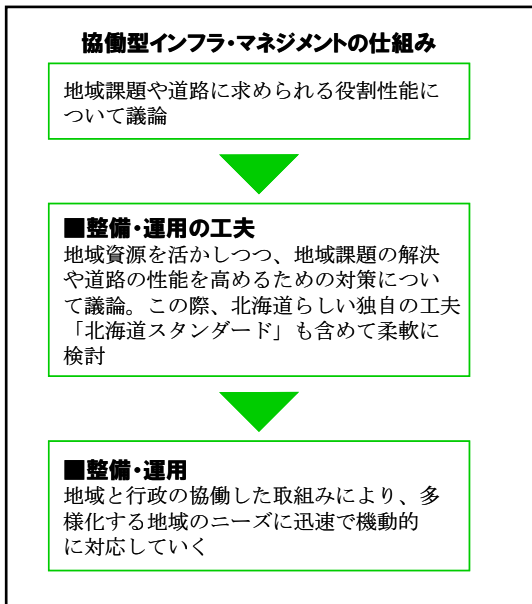


図-3 協働型インフラ・マネジメントの仕組み

また、道路管理者だけが行動するのではなく、ある時は協働で、ある時は地域やユーザーが自ら行うことも考え、地域が道づくりに主体的に参画し、現状の問題点と地域のニーズに即した道路構造と運用方法を検討することで、無駄を省いた真に必要な道路整備の実現が可能となる。

4. 組織体制について

岩内共和道路の事業において、協働型インフラ・マネジメントを導入した際の組織体制を図-4に示す。

本事業では、地域協働による企画立案のため、ワークショップメンバーを中心に、その中で生み出された具体的なアイデアを実行するための3つの分科会を設置している。（防雪林の育成及び利活用を検討する防雪林分科会、シーニックパイウェイ北海道「支笏洞爺ニセコルート」ニセコ羊蹄エリアの景観資源の発掘と活用方法を検討するビューポイント分科会、岩内共和道路を通じて地域の情報発信について検討する情報分科会）

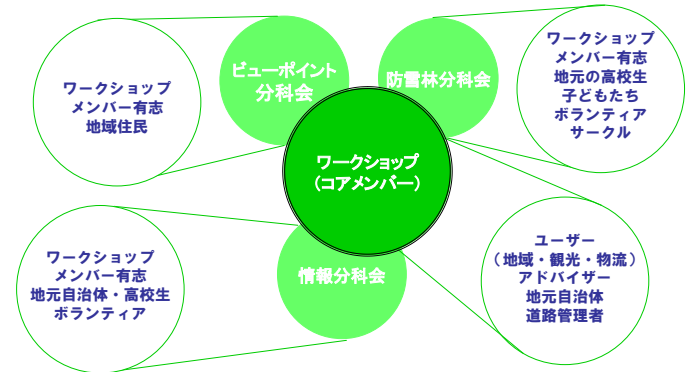


図-4 協働型インフラ・マネジメントの組織体制

5. 主な取り組み状況について

(1) 防雪林の植樹

防雪林分科会では、岩内共和道路における防雪林の機能の理解促進と整備・維持管理の担い手発掘を目的として、まず平成18年度に地域の高校生を対象とした防雪林の体験植樹を実施した。取り組みの概要は次のとおりである。

○平成18年度

実施項目：防雪林用苗木の植樹

参加者：北海道立共和高等学校の生徒、先生及び地元住民23名

実施内容：アカエゾトウヒ及びトドモミの苗木各50本の植樹。

（写真-1）



写真-1 防雪林用苗木の植樹状況

平成19年度では、息の長い取組みとして継続させることをねらいとし、より年齢の低い層をターゲットに環境教育を通じて防雪林を種から育てる総合的な体験植樹（写真-2）を実施した。取り組みの概要は次のとおりである。

○平成 19 年度（夏）

実施項目：防雪林用樹木の種の採取と植付け

参加者：共和町立中央幼児センター園児及び先生
37 名

実施内容：絵本勉強会（専門家から樹木に関するレクチャー）、地元在来種であるクルミの種採りと苗づくり（144 本）

○平成 19 年度（秋）

実施項目：防雪林用苗木づくり

参加者：はまなす幼児センター園児、岩内・共和両町の住民、岩内・共和町 V S P 団体 60 名

実施内容：アカエゾトウヒのドラム缶苗木づくり（100 本）

◆絵本勉強会



◆苗づくり



◆種採り



◆ドラム缶苗木づくり



写真-2 種から育てる総合的な体験植樹

平成 23～24 年度は、過去に体験植樹に参加していただいた子供達とその親を主体に、成長したドラム缶苗を防雪林整備箇所植える植樹会を実施した。地元自治体の広報による植樹参加者の募集、地元商工会青年部による軽食の提供等、楽しみながら防雪林に愛着を持っていただけるイベントとして成長した。取り組みの概要は次のとおりである。

○平成 23 年度～24 年度

実施項目：防雪林整備箇所への苗木の植樹

参加者：岩内町、共和町の住民 42 名（H23）、52 名（H24）

実施内容：防雪林苗木の植樹（H23:100 本、H24:300 本）、ドラム缶苗の移植（H23）、食事会（H23, H24）（写真-3）

◆ドラム缶苗の掘り出し方の実演



◆防雪林の植樹



◆作業後の食事会



◆地元商工会によるサポート



写真-3 植樹会の状況

今回植樹会の後に行ったアンケート調査結果では、植樹会全体としての満足度は、「満足」、「やや満足」を合わせると 85%という高い満足度を得る結果となった。また、苗木植えの感想を伺ったところ約 7 割の方が「防雪林づくりに今後も参加したい」と回答しており、防雪林の植樹を通じた環境整備に対する関心の高さを確認することが出来た。（図-5）

なお、防雪林に対する愛着の醸成を目指して、植樹時における苗木の高さをマーキングし、防雪林の成長と参加した子供の成長を比較できるようにするとともに、植樹会参加者の写真を現地に設置した。（写真-4）

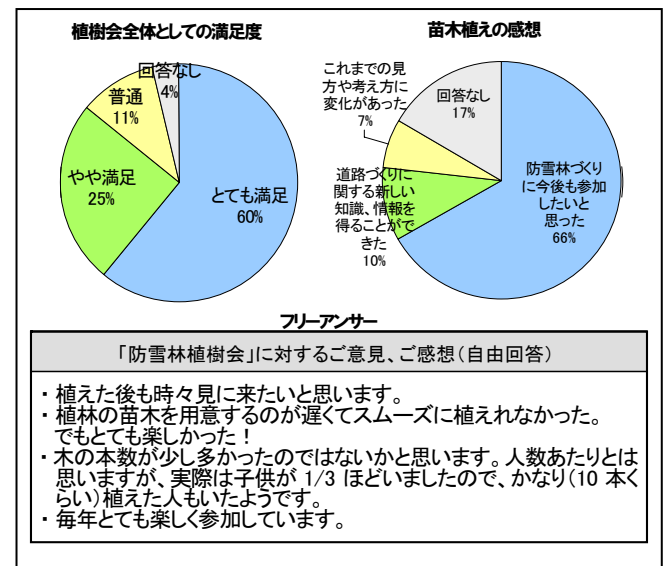


図-5 植樹会アンケート結果（H24 実施）



写真-4 成長を記録するマーキング（左）、参加者の写真（右）

(2) 景観資源の活用に配慮した駐車帯の検討

岩内共和道路のある一般国道276号はシーニックバイウェイ北海道「支笏洞爺ニセコルート」のニセコ羊蹄エリアにある。ビューポイント分科会では、田園風景や羊蹄山、ニセコ連山を眺望できるその優れた景観資源と除雪車待避場の機能を両立させた駐車帯の活用方法について検討した。取り組みの概要は次のとおりである。

○平成18年度

ワークショップ参加者による景観資源の掘り起こし、地元写真家（ワークショップ参加者）のガイドによる候補地の選出、ワークショップ参加者による現地視察。

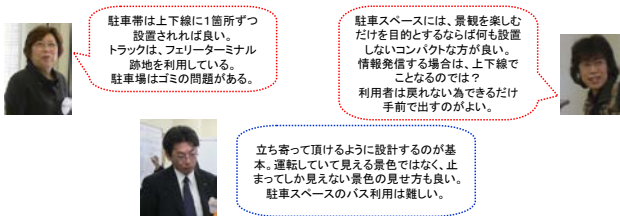
○平成19～22年度

景観資源に配慮した除雪車待避場の位置の選定、利用形態、適切な規模・機能・細部デザインの確認。

検討にあたっては、ワークショップで景観資源の確認と地域の特性を反映した利用者ニーズ及び使い方を確認するとともに、メンバーや地元写真家と共に現地を歩き、設置候補地を選定した。（写真－5）



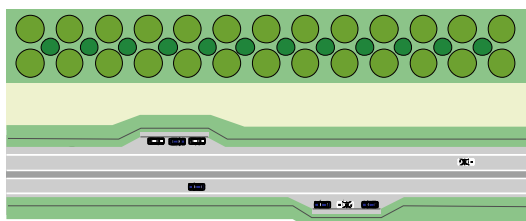
写真－5 景観資源の活用に配慮した駐車帯の検討



図－6 駐車帯の検討（参加メンバーのご意見）

また議論の中では、駐車帯の使われ方、利用者ニーズについてメンバーの多くの意見を取り入れた上で、駐車帯の設置位置、設置箇所数、規模、景観への配慮といったことについて議論した。（図－6）

その結果、位置については盛土高さが高く、眺望が良好な岩内共和道路終点側（共和町国富側）の上下線に設置し、規模については近傍に別の駐車場が存在することから大型車の停車を考慮せず、乗用車のみ数台程度の小規模なものとした。（図－7）



図－7 上下線に配慮した小規模な駐車帯

6. まとめ

平成17年度から続いた岩内共和道路ワークショップは立ち上げから8年が経過し、供用を間近に控え一定の議論はなされたことから、定期的な開催は今年度で終える予定である。

この間、防雪林づくりにおいては、育成方法や利活用方法について地域の意見を取り入れた具体的な地域協働のあり方を検討し、地域の主体的な運営と様々な年代の地元住民者による植樹会を実現することができた。また、参加者に防雪林に対する愛着を持っていただけるような取り組みを行ったことから、供用後も地域協働による持続的な防雪林の維持管理の実現が期待される。今後も必要に応じてこのワークショップを開催し、地域の声を反映した維持管理手法について検討・実践していきたいと考えている。

一方、駐車帯の整備については、道路管理者だけではわからない地域の実情に即した意見を頂くことで、道路利用者サービスの向上、道路景観の向上など利用者や地域にとってのメリットが創出された。

また、道路管理者にとっては、冬期の除雪車待避場を夏季の駐車帯として有効活用する一方で、ワークショップにおける利用者ニーズの把握から、コンパクトな駐車場の設置が可能となり整備コストの削減にもつながった。

このように、地域やユーザーと行政が一体となって道路について考え、多様なニーズを的確に反映することで、これまでのような画一的な整備手法ではできない、利用者満足度や地域の魅力向上が図られるとともに、事業の効果的な推進、並びにコスト削減を実現することが出来た。

この取り組みが、各地域における協働型インフラ・マネジメントの推進に向けての参考となれば幸いです。

謝辞：岩内共和道路ワークショップに参加し、ご協力していただいているメンバーの方々に感謝をいたします。